２０２４年4月１２日（金）

老球の細道７８９号

プラハを訪れたのは「どこのドイツだ」⑨

・・・ユーロバスケットボールツアー紀行〈Ⅱ〉・・・

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

【２００９年　１２月２９日】ＰＡＲＴⅢ

世界遺産の美しい並びの町並みを眺めながらようやく体育館へ着いた。体育館入り口にはジャコメッテイーの彫刻が肥満したような巨大な女性像がバスケットボールを抱えて立つ。いよいよツアーの目玉であるチェコのバスケットボールクリニック。体育館の中にはすでに多くの見学者とテレビ局などのマスコミ関係者がいた。日本人コーチが来たということで取材に来ているようだ。今回のバスケットユーロアカデミーの企画がいかに注目されているかがわかる。バスケットボールの認知度が日本とは段違いである。

クリニック講師は元チェコ男子代表チームキャプテン、現チェコ代表コーチのミハイル・ジュデイックである。デモンストレターはU-18女子プラハ代表チーム。葵高校女子U-18チーム同様皆美人揃いのチームであった。日本を飛び立つ前に原町高校時代の教え子からのメッセージを思い出した。「先生、チェコは美人の産地ですから気をつけてください」。嘘ではなかった。がぜん講習会への集中力がアップしてしまった。

午前のクリニックはバスケットボールで身体をマッサージするようなストレッチ、色々な動作から片足でストップするバランストレーニング、そして、バスケットボールのフットワークに必要な方向変換の速さを養成するアジリテイードリルであった。今まで見たこともないような珍しいドリルが盛りだくさん。感心したのは、これらのドリルが最終的にはバスケットボールのプレーに必ずリンクさせられている。単なるトレーニングではなく、バスケットボールのトレーニングだというコンセプトが明確だった。

午前の部終了後、チェコのテレビ局のインタビューに応じるようにトスティンから要請された。またしても年上の宿命。やるしかないとあきらめ、テレビ顔を作って質問に答えた。そばでトスティンが「室井先生、スーパースター！」などと茶化すものだから、私はすっかりコーチＫになりきってしゃべってしまった。

午後からの練習はマンツーマンオフェンスがテーマだった。内容は１－４オフェンスからのモーションオフェンス。今まで１－４オフェンスはナンバープレーにしか使えないと思っていたが、このエントリーからモーションオフェンスにシステム化できることに気づかされた。目から鱗、鼻から鼻毛、固定観念はすぐに崩れる。私の知らないアイデイアが無尽蔵にある。また、すばらしかったのはコーチの指導力たった。今回のクリニックで初めて指導するU-18の女の子たちに、初めて学ぶ１－４システムをたった2時間でマスターさせてしまった。大声もあげず淡々とコーチングしながら。プレーヤーをすぐその場でできるようにしてしまうのが本物のプロフェッショナルであることを改めて痛感させられた。〈続〉

【訂正】７８７号の「モーツアルト交響曲２６番（悲しみの交響曲）」は「４０番」です。